

高校の運動クラブ員の成熟度に関する研究

保健体育教室 福元 和行*

A Study on the Maturity of Sportclub Members in High School

Kazuyuki FUKUMOTO

I 研究目的

平成8年に中央教育審議会の答申が出され、答申に示された教育改革の基本的方向である、学校のスリム化や学校・地域・家庭の連携の重要性の認識に沿って、近年学校運動部の地域移行に対しての議論が盛んに行われているが、学校運動部の指導をめぐっては従来より様々な議論がなされてきた。何を、どのように指導すればよいのかは依然として検討されていい、重要な問題であるが、指導者のリーダー行動によりクラブ員に表れる変容の個人差を説明する理論として、SL理論がある。SL理論では、リーダーシップの有効性は部下の成熟の度合いに依存すると説明し、成熟度を出るだけ高い目標を設定しようとする本人の基本的な姿勢(成就意欲)、責任負担の意志と能力、対象となる相手または集団が持つ教育なり経験なりの程度、と定義している¹⁾。そして、成熟度が高まるにつれ、クラブ員は指導者依存的から自律的へと変容するが、指導内容も変化させていくのが有効的であるとされている。SL理論を使用した研究には野崎他²⁾、中村³⁾の研究があるが、まだその数は少ない。

本研究ではSL理論で使用されている成熟度を表す変数の中から意欲を採用し、また、教育・経験の程度を測定する変数として学年、知識を設定した。そして、成熟度関連変数毎に指導内容・指導方法と満足度、モチベーション、指導者の有効性の関係を分析することにより、クラブ指導者の指導内容・指導方法と目的変数の関連性にクラブ員の成熟度が影響を及ぼしているか、また、学年、知識保持の程度、意欲が成熟度を表す尺度になりうるか、ということの検討を研究目的としている。

*Department of Physical Education, Faculty of Education, Tottori University

II 研究方法

1. データの収集

鳥取県内の公式野球部の存在するすべての高校26校に調査票を発送し、21校より回答を得たが、有効標本数は394名^{※1)}であった。調査期間は平成8年10月～11月である。

調査内容は基本的属性に関して8項目、満足度に関して3項目、モチベーションに関して3項目、指導内容・指導方法に関して10項目であった。なお、基本的属性に関しては表-1の通りである。

表1 標本の特性

	特 性	N	%
入部目的	甲子園出場	289	80.1
	技術・体力の向上	54	15.0
	友人の獲得	1	0.3
	その他	17	4.7
野球に対する知識の程度	かなり持っている	88	22.3
	どちらとも言えない	255	64.6
	あまり持っていない	52	13.2
クラブの目標達成に対する意欲	目標達成のために頑張れる	346	87.6
	どちらとも言えない	48	12.2
	頑張れそうにない	1	0.3
クラブに対する満足度	満足している	170	42.9
	どちらとも言えない	186	47.0
	満足していない	40	10.1
練習方法に対する満足度	満足している	85	21.5
	どちらとも言えない	242	61.3
	満足していない	68	17.2
練習量	適量である	292	74.1
	適量でない	102	25.9
指導者の有効性	監督なしでは自分の目標の達成は考えられない	121	30.6
	かなり援助してくれる	190	48.1
	少し援助してくれる	84	21.3
学 生	1年生	188	47.5
	2年生	208	52.5

2. データの分析

関連性の分析には χ^2 検定を、また、連関の分析には ϕ 係数を使用した。

また、成熟度を測定する変数である知識については、あなたは野球に対する知識を持っていると思いますか、また、意欲については、クラブの目標達成のために頑張ることが出来ますか、という質問を設定した。

なお、本研究で採用した仮説は以下の通りである。

1. 成熟度が高まると、構造づくり要因・配慮要因の両方に有意差の認められる変数が多く見られるであろう。
2. 成熟度が高まると自律性が向上するため、指示的指導よりも助言的指導の方が目的変数との連関が強くなるだろう。

III 結果及び考察

1. 学年別に見た分析結果

1) 満足度

表 2-1-1 は指導者の指導内容・指導方法と野球部員のクラブに対する満足度のクロス集計結果である。有意差の認められる変数は 1 年生の方に多く見られ、指導者の指導の影響を 1 年生の方が受けやすいことを示していると考えられる。また、1 年生では技術指導、練習方法の指導、練習計画の作成という構造づくりに関わる要因に有意差が認められるのに対して、2 年生では練習方法の指導に有意傾向が認められるのみである。さらに、2 年生では指導者の快適な練習のための配慮、ク

表 2-1-1 学年別に見た指導内容・指導方法とクラブに対する満足度のクロス集計結果

指導内容・指導方法	1 年生		2 年生	
	χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
技術指導	18.782***	0.316	2.300	0.120
練習方法の指導	5.253*	0.168	3.796†	0.135
練習計画の作成	3.204*	0.131	2.148	0.102
個人目標の達成のための指導	5.808*	0.176	7.488**	0.190
快適な練習のための配慮	6.768**	0.190	14.267***	0.263
クラブ内の問題の解決への努力	11.865***	0.252	17.510***	0.291
悩み・不満に対するカウンセリング	1.533	0.091	1.242	0.077
クラブ内の人間関係への配慮	4.134*	0.149	10.149**	0.221
指示的指導	8.390**	0.212	4.848*	0.153
助言的指導	5.052*	0.164	5.541*	0.163

† p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

クラブ内の問題の解決への努力、クラブ内の人間関係への配慮という配慮関連要因で高い有意性を示しており、学年差が見られるが、このことはクラブの運営に対する立場の違いを反映したものと考えることが出来よう。つまり、2年生は最上級生であり、クラブの運営についての関わりが1年生よりも大きい。そのため、配慮要因についての指導を期待しているし、指導がなされた方がクラブに対する満足度も高いと考えられる。一方、1年生では2年生ほどクラブ全体に意識が及ばない

表2-1-2 学年別に見た指導内容・指導方法と練習方法に対する満足度のクロス集計結果

指導内容・指導方法	1 年 生		2 年 生	
	χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
技術指導	5.825*	0.176	10.367**	0.223
練習方法の指導	3.543†	0.138	7.561**	0.191
練習計画の作成	0.537	0.054	5.177*	0.158
個人目標の達成のための指導	4.869*	0.162	1.805	0.093
快適な練習のための配慮	19.394***	0.322	18.189***	0.296
クラブ内の問題の解決への努力	1.968	0.103	2.426	0.108
悩み・不満に対するカウンセリング	5.101*	0.166	5.467*	0.162
クラブ内の人間関係への配慮	5.268*	0.169	11.332***	0.233
指示的指導	8.080**	0.208	1.457	0.084
助言的指導	3.658†	0.140	7.440**	0.189

† p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

表2-1-3 学年別に見た指導内容・指導方法と練習量に対する満足度のクロス集計結果

指導内容・指導方法	1 年 生		2 年 生	
	χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
技術指導	7.401**	0.199	0.049	0.015
練習方法の指導	14.503***	0.279	0.008	0.006
練習計画の作成	7.759**	0.204	0.165	0.028
個人目標の達成のための指導	6.895**	0.193	0.241	0.034
快適な練習のための配慮	3.987*	0.146	4.181*	0.142
クラブ内の問題の解決への努力	2.555	0.117	0.353	0.041
悩み・不満に対するカウンセリング	6.468*	0.186	0.915	0.066
クラブ内の人間関係への配慮	3.620†	0.140	0.075	0.019
指示的指導	8.674**	0.216	0.804	0.062
助言的指導	11.054***	0.244	2.329	0.106

† p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

め、配慮要因の有意性が低いと考えられる。

指導方法については連関係数の比較で、1年生では指示的指導が助言的指導を上回っているが、2年生では1年生と逆の結果になっており、学年差が見られる。

表2-1-2は指導内容・指導方法と練習方法に対する満足度のクロス集計結果である。技術指導、練習方法の指導、練習計画の作成という構造づくりに関連した変数と練習方法に対する満足度の連関は2年生の方で高い。一方、配慮要因に関連した変数では、快適な練習のための配慮が両学年で最も強い連関を示しているが、学年の比較では1年生の方の値が上回っている。しかし、クラブ内の人間関係への配慮では2年生の方の連関係数の値が高くなっており、両群の明確な差異を指摘しがたい結果となっている。

指導方法では1年生では助言的指導よりも指示的指導が、そして、2年生では指示的指導よりも助言的指導の方が練習方法についての満足度を高めるという結果が見られ、学年差が表れている。

表2-1-3は指導内容・指導方法と練習量に対する満足度のクロス集計結果である。1年生では多くの変数で有意差が認められたが、2年生では1変数で有意差が認められただけであり、練習量に対する満足度は2年生では指導の頻度との関連性が小さく、1年生では大きいことがわかる。

また指導方法では、1年生でクラブに対する満足度や練習方法に対する満足度と異なり、指示的指導よりも助言的指導の頻度が高い場合に練習量についての満足度が高い傾向が見られる。

2) モティベーション

表2-2-1は指導内容・指導方法と個人目標の達成の可能性のクロス集計結果である。1年生では4変数に有意差・有意傾向が認められたのに対して、2年生は1変数のみであり、指導の頻度との関連性が1年生の方で大きいことがわかる。個別の変数では、快適な練習のための指導者の配慮が個人目標の達成の可能性を高める、という結果が1年生に見られる。また、1年生で指示的指導に有意差が認められており、有意差の認められていない2年生との差異を示している。

表2-2-2は指導内容・指導方法と練習の楽しさのクロス集計結果である。練習の楽しさをめぐっては2年生の方に有意差の認められる変数が多く見られる。2年生では技術指導、快適な練習のための配慮に他の変数と比較して高い連関が見られており、練習の楽しさと関連のある変数であることがわかる。1年生では技術指導、個人目標の達成のための指導に有意差・有意傾向が認められるが、連関の程度は弱い。

指導方法については1年生では指示的指導が連関の強さで助言的指導を上回り、2年生では助言的指導が指示的指導を上回っているが、このことは1年生では指導者の指導が頻繁に行われる指導

表2-2-1 学年別に見た指導内容・指導方法と個人目標の達成の可能性のクロス集計結果

指導内容・指導方法	1 年 生		2 年 生	
	χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
技術指導	3.677 †	0.140	4.407*	0.146
練習方法の指導	3.901*	0.144	2.666	0.113
快適な練習のための配慮	9.908**	0.230	0.813	0.062
指示的指導	4.299*	0.152	2.602	0.112

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

表 2-2-2 学年別に見た指導内容・指導方法と練習の楽しさのクロス集計結果

指導内容・指導方法	1 年 生		2 年 生	
	x^2 値	ϕ 係数	x^2 値	ϕ 係数
技術指導	3.090 †	0.128	12.783***	0.248
練習方法の指導	2.411	0.114	5.525*	0.163
個人目標の達成のための指導	4.789*	0.160	0.061	0.017
快適な練習のための配慮	1.991	0.103	11.806***	0.239
クラブ内の問題の解決への努力	0.531	0.053	4.065*	0.140
指示的指導	9.060**	0.220	3.891*	0.137
助言的指導	5.751*	0.175	10.908**	0.229

† p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

表 2-2-3 学年別に見た指導内容・指導方法とクラブ内での他人による承認のクロス集計結果

指導内容・指導方法	1 年 生		2 年 生	
	x^2 値	ϕ 係数	x^2 値	ϕ 係数
技術指導	4.050*	0.147	1.668	0.090
個人目標の達成のための指導	8.837**	0.217	0.093	0.021
快適な練習のための配慮	0.342	0.043	3.150 †	0.123
クラブ内の問題の解決への努力	2.077	0.105	8.498**	0.203
悩み・不満に対するカウンセリング	5.219*	0.167	1.609	0.088
クラブ内の人間関係への配慮	7.254**	0.197	5.532*	0.163
指示的指導	4.749*	0.159	1.146	0.075
助言的指導	11.237***	0.245	3.846*	0.136

† p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

性の強い指導方法の方が、そして2年生では個人或いは集団の主体性を重視した指導の方が練習の楽しさと関連が深い、ということの意味しており、1年生、2年生の成熟度の違いを反映したものと考える。

表2-2-3は指導内容・指導方法とクラブ内での他人による承認のクロス集計結果である。1年生では個人目標の達成のための指導やクラブ内の人間関係への配慮と他人による承認との間に有意差が認められているが、指導が行われることにより技術や体力が向上したり、人間関係が円滑化されることにより、クラブ内で承認される可能性が高くなるものと考えられる。

指導方法では助言的指導に2学年とも有意差が認められるが、1年生ではモチベーション関連要因3変数の中で、唯一連関係数の大きさが指示的指導を上回っており、助言的指導の指導頻度が高いとクラブ内で承認されていると考えている人が多い、と解釈できるが、クラブ指導でのクラブ員の人間関係を重視した助言的指導の重要性を物語るものと考えられる。

3) 指導者の有効性

表 2—3 は指導内容・指導方法と指導者の有効性のクロス集計結果であるが、指導者の有効性は 1 年生と 2 年生では大きな違いが見られる。2 年生では技術指導を除いた残りのすべての変数で有意差が見られたが、1 年生では指導内容に関しては構造づくりに関連した 1 変数のみに有意差が認められた。2 年生の変数の中で 0.1% 水準という高い有意性を示した変数は、悩み・不満に対するカウンセリング、クラブ内の人間関係への配慮、クラブ内の問題の解決への努力、快適な練習のための配慮、個人目標の達成のための指導であり、これらの指導内容についての指導頻度が高いと部員の入部目的の達成に向けての指導者の有効性が高くなる、という結果を示しているが、ほとんどの変数が配慮要因に関連したものであり、クラブの運営に関わる可能性の高い 2 年生の立場から見た場合、クラブ員では解決し難い問題、或いは指導者が関わった方が解決が容易な問題に対しての指導者の取り組みの重要性を示すものとする。

指導方法では両学年とも助言的指導の指導頻度と指導者の有効性の間に、有意差が認められた。

学年別に見た指導内容・指導方法と満足度、モチベーション、指導者の有効性の関連性を分析してきた。全体的に見て 1 年生よりも 2 年生に構造づくり要因・配慮要因の両方に有意差の認められる変数が多数見られるだろうという仮説を持っていた。しかし、クラブに対する満足、練習の楽しさ、指導者の有効性についてはこの仮説を支持する結果となっているが、他の目的変数については支持する結果となっていないため、この仮説が全面的に実証されたわけではない。しかし、指導方法で 1 年生に指示的指導の方が満足度、モチベーションの高さとの関連性が高い場合が多く見られ、2 年生ではほとんどの目的変数で、助言的指導との関連性の強さが見られており、学年が成熟度の指標になりうる可能性が示唆されたと考える。指導者の有効性では、2 年生で配慮要因に関連した指導及び助言的指導と指導者の有効性の関連性の高さが目立っている。

表 2—3 学年別に見た指導内容・指導方法と指導者の有効性のクロス集計結果

指導内容・指導方法	1 年生		2 年生	
	χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
練習方法の指導	1.167	0.079	4.517*	0.147
練習計画の作成	0.214	0.034	3.912*	0.137
個人目標の達成のための指導	5.259*	0.168	11.470***	0.235
快適な練習のための配慮	1.127	0.078	13.338***	0.254
クラブ内の問題の解決への努力	2.637	0.119	15.313***	0.272
悩み・不満に対するカウンセリング	0.540	0.054	18.452***	0.298
クラブ内の人間関係への配慮	0.650	0.059	15.724***	0.275
指示的指導	0.753	0.064	9.669**	0.216
助言的指導	4.550*	0.156	13.138***	0.251

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

2. 知識保持の程度別に見た分析結果

1) 満足度

表3-1-1は野球についての知識保持の程度別に見た指導内容・指導方法とクラブに対する満

表3-1-1 知識保持の程度別に見た指導内容・指導方法とクラブに対する満足度のクロス集計結果

指導内容・指導方法	低知識		高知識	
	x^2 値	ϕ 係数	x^2 値	ϕ 係数
技術指導	14.082***	0.214	3.215†	0.191
練習方法の指導	7.019**	0.151	1.758	0.141
練習計画の作成	5.209*	0.130	0.059	0.026
個人目標の達成のための指導	10.695**	0.187	2.876†	0.181
快適な練習のための配慮	17.184***	0.237	2.658	0.175
クラブ内の問題の解決への努力	25.699***	0.290	3.532†	0.202
悩み・不満に対するカウンセリング	2.924†	0.098	0.012	0.012
クラブ内の人間関係への配慮	16.066***	0.230	0.152	0.042
指示的指導	12.072***	0.199	0.653	0.087
助言的指導	8.653**	0.168	2.262	0.160

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表3-1-2 知識保持の程度別に見た指導内容・指導方法と練習方法に対する満足度のクロス集計結果

指導内容・指導方法	低知識		高知識	
	x^2 値	ϕ 係数	x^2 値	ϕ 係数
技術指導	10.338**	0.184	5.273*	0.245
練習方法の指導	6.272*	0.143	4.092*	0.216
練習計画の作成	2.000	0.081	2.042	0.153
個人目標の達成のための指導	2.261	0.086	5.430*	0.248
快適な練習のための配慮	27.914***	0.302	8.112**	0.305
クラブ内の問題の解決への努力	2.344	0.088	2.233	0.160
悩み・不満に対するカウンセリング	8.475**	0.167	1.397	0.126
クラブ内の人間関係への配慮	8.792**	0.170	5.874*	0.258
指示的指導	8.604**	0.170	0.178	0.045
助言的指導	6.716**	0.148	4.595*	0.229

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

足度のクロス集計結果である。低知識群では指導内容に関連した 8 変数のすべてに有意差が認められたが、高知識群で有意差の認められた変数は皆無であり、指導の程度の影響を受けていないと考えられる。低知識群の中で、クラブ内の問題の解決への努力、快適な練習のための配慮、クラブ内の人間関係への配慮に他の変数と比較して高い連関が見られるが、これらの変数は配慮要因に属する変数であり、指導頻度の高さがクラブ内の人間関係の円滑化をもたらし、クラブに対する満足度を高めるものと考えられる。

指導方法ではクラブに対する満足度と関連の深いのは、低知識群では指示的指導であり、学年別に見た 1 年生と同様の結果となっている。

表 3-1-2 は指導内容・指導方法と練習方法に対する満足度のクロス集計結果である。低知識群、高知識群とも有意差の認められる変数が多数見られるが、指導内容に関連した変数で連関係数 0.200 以上の値を示したのは、低知識群では快適な練習のための配慮だけである。一方、高知識群では、快適な練習のための配慮、クラブ内の人間関係への配慮、個人目標の達成のための指導、技術指導、練習方法の指導の 5 変数であり、しかも、内訳は構造づくり要因 3 変数、配慮要因 2 変数となっており、偏りのない分布となっている。

指導方法では低知識群、高知識群とも指示的指導よりも助言的指導の方が連関係数の値が大きく、練習方法についての満足度と助言的指導の関連性が深いことが伺えるが、特に、高知識群では大きく上回っており、成熟度の違いの影響を示唆するものとする。

表 3-1-3 は指導内容・指導方法と練習量に対する満足度のクロス集計結果である。高知識群よりも低知識群に有意差・有意傾向の認められる変数が多く見られるが、他の表に表れている連関係数と比較すると、連関の水準が低いことが目に付く。低知識群で目立つ変数は、練習方法の指導、快適な練習のための配慮、悩み・不満に対するカウンセリングであり、指導頻度が高い場合、満足度が高くなっている。

指導方法では両群とも助言的指導のみに有意差・有意傾向が認められており、学年の比較分析と同様の結果となっている。

表 3-1-3 知識保持の程度別に見た指導内容・指導方法と練習量に対する満足度のクロス集計結果

指導内容・指導方法	低 知 識		高 知 識	
	x^2 値	ϕ 係数	x^2 値	ϕ 係数
技術指導	4.906*	0.127	0.027	0.018
練習方法の指導	6.756**	0.149	0.042	0.022
練習計画の作成	1.556	0.071	3.526 †	0.201
個人目標の達成のための指導	2.958 †	0.099	2.497	0.168
快適な練習のための配慮	7.119**	0.153	1.109	0.113
悩み・不満に対するカウンセリング	7.134**	0.153	0.451	0.072
助言的指導	8.789**	0.170	3.202 †	0.191

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

2) モティベーション

表3-2-1は指導内容・指導方法と個人目標の達成の可能性のクロス集計結果である。低知識群では技術指導、練習方法の指導という構造づくりと関連した内容の指導の頻度が高く、さらに、助言的指導ではなく指示的指導方法を採用した場合に、個人的目標の達成の可能性が高くなるという結果を示している。

表3-2-2は指導内容・指導方法と練習の楽しさのクロス集計結果である。指導内容については低知識群では技術指導、練習方法の指導、練習計画の作成、快適な練習のための配慮の4変数に有意差が認められたが、3変数は構造づくりに関連した変数である。一方、高知識群ではクラブ内の問題の解決への努力、快適な練習のための配慮、技術指導、悩み・不満に対するカウンセリングの4変数に有意差・有意傾向が認められたが、3変数は配慮に関連した変数であり、練習の楽しさに関連している変数の内容が、低知識群では技術習得と関連の深い練習に関係した変数が中心となっているのに対して、高知識群では人間関係の円滑化と関連の深い配慮に関連した変数が中心になっており、両群間に差異が見られる。

指導方法では低知識群では指示的指導と助言的指導の有意性が拮抗しているが、高知識群では助

表3-2-1 知識保持の程度別に見た指導内容・指導方法と個人目標の達成の可能性のクロス集計結果

指導内容・指導方法	低知識		高知識	
	χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
技術指導	13.863***	0.213	0.250	0.053
練習方法の指導	7.057**	0.152	0.442	0.071
指示的指導	13.106***	0.207	1.694	0.140

** p < .01 *** p < .001

表3-2-2 知識保持の程度別に見た指導内容・指導方法と練習の楽しさのクロス集計結果

指導内容・指導方法	低知識		高知識	
	χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
技術指導	12.171***	0.199	3.480†	0.199
練習方法の指導	7.041**	0.152	1.488	0.130
練習計画の作成	3.554†	0.108	0.181	0.046
快適な練習のための配慮	8.423**	0.166	3.877*	0.211
クラブ内の問題の解決への努力	0.867	0.053	6.193*	0.267
悩み・不満に対するカウンセリング	1.805	0.077	2.876†	0.181
指示的指導	8.762**	0.169	3.141†	0.190
助言的指導	8.656**	0.168	10.465**	0.345

† p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .001

表 3-2-3 知識保持の程度別に見た指導内容・指導方法とクラブ内での他人による承認のクロス集計結果

指導内容・指導方法	低知識		高知識	
	x^2 値	ϕ 係数	x^2 値	ϕ 係数
技術指導	2.795 †	0.095	1.387	0.126
個人目標の達成のための指導	4.870*	0.126	0.001	0.003
クラブ内の問題の解決への努力	6.119*	0.141	3.572 †	0.203
悩み・不満に対するカウンセリング	0.851	0.053	6.653**	0.277
クラブ内の人間関係への配慮	8.540**	0.167	1.628	0.137
指示的指導	2.240	0.086	3.581 †	0.204
助言的指導	6.419*	0.145	6.656**	0.277

† p < .10 * p < .05 ** p < .01

言的指導が圧倒的に優位であり、成熟度の違いを示唆しているものと考える。

表 3-2-3 は指導内容・指導方法とクラブ内での他人による承認のクロス集計結果である。低知識群ではクラブ内の人間関係への配慮、クラブ内の問題の解決への努力という配慮要因に関連した 2 変数と個人目標達成のための指導、技術指導という構造づくりに関連した 2 変数に有意差・有意傾向が見られる。一方、高知識群では悩み・不満に対するカウンセリング、クラブ内の問題の解決への努力、という配慮に関連した 2 変数に有意差・有意傾向が認められており、両群とも配慮要因の 2 変数が見られるが、クラブ内での認知・承認に対する配慮要因に関連した指導の重要性を示唆するものと考える。

指導方法では両群ともに助言的指導の優位が認められるが、クラブ内で他人を認め、他人に認められる関係を構築する上で、指示的指導よりも助言的指導の方が有効であることを示しているものと考える。

3) 指導者の有効性

表 3-3 は指導内容・指導方法と指導者の有効性のクロス集計結果である。高知識群に指導頻度と指導者の有効性の関連性を示す変数が多く見られるが、学年別分析と同様配慮要因に関連した変数に高い有意性が見られる。また、低知識群でも有意水準は低いながらも、高知識群と同様配慮要因に関連した変数に有意差・有意傾向が認められる。

指導方法では低知識群では助言的指導が優勢であるが、高知識群では指示的指導と助言的指導の指導者の有効性との関連性の強さが拮抗している。知識保持の程度別に見てきたこれまでの分析結果に照らしてみた場合、高知識群が低知識群よりも成熟度が高いはずであるが、意外な結果となっており、期待値 5 以下のセルの出現の回避のために行ったセルの統合の再検討が必要であると考えられる。

知識保持の程度別に指導内容・指導方法と満足度、モチベーション、指導者の有効性の関連性を分析してきたが、高知識群では構造づくり、配慮の各要因に関連した変数で低知識群よりも有意差の認められる変数が多く見られるだろう、という仮説を支持したのは練習方法に対する満足度、練習の楽しさ、クラブ内での他人による承認を目的変数とした場合であり、他の 3 種類の分析では

表 3-3 知識保持の程度別に見た指導内容・指導方法と指導者の有効性のクロス集計結果

指導内容・指導方法	低知識		高知識	
	χ^2 値	ϕ 係数	χ^2 値	ϕ 係数
技術指導	0.957	0.056	4.145*	0.217
練習方法の指導	0.722	0.049	8.716**	0.315
練習計画の作成	1.416	0.068	2.845†	0.181
個人目標の達成のための指導	8.015**	0.162	8.468**	0.310
快適な練習のための配慮	3.493†	0.107	12.953***	0.386
クラブ内の問題の解決への努力	4.565*	0.122	20.002***	0.479
悩み・不満に対するカウンセリング	4.849*	0.126	13.410***	0.390
クラブ内の人間関係への配慮	0.167	0.023	14.158***	0.401
指示中心的指導	3.258†	0.103	8.834**	0.319
助言中心的指導	8.527**	0.167	8.656**	0.314

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

支持されたとは言い難い。しかし、指導方法では、低知識群では指示的指導と関連性の強い目的変数が多いのに対して、高知識群では助言的指導の目的変数との強い関連性が認められており、高知識群の成熟度の高さが示唆された。

3. 意欲の程度別

1) 満足度

表 4-1 は意欲の程度別に見た指導内容、指導方法とクラブに対する満足度のクロス集計結果である。有意差の認められる変数の数で低意欲群と高意欲群では大きな違いが見られ、高意欲群では多くの変数に有意差が認められた。そして、高成熟群と見られる高意欲群には構造づくり、配慮要因のほとんどの変数に有意差が認められるため、仮説を支持する結果となっている。しかし、指導方法をめぐっては助言的指導を指示的指導が連関の強さで上回っており、自律的な活動よりも依存的な活動の方が目的変数との連関が強いという結果になっているため、自律性と深い関わりのある成熟度を表す指標として単一に意欲を使用することには無理があるように思われる。なるほど、SL理論が提唱するように、自律性の度合いが高まるためには意欲は必要不可欠であるが、本研究に見られるように単一の変数として処理した場合、意欲はあるが能力が伴わない場合も考えられ、成熟度を表す尺度には成り難いと考えられる。意欲を成熟度を表す指標として使用する場合、他の成熟度関連要因と統合して使用する必要性があると考えられる。なお、分析結果を掲載していない満足度、モチベーション、指導者の有効性に関しての分析結果の中に、表 4-1 と同様の結果はいくつか見られた。

表4-1 意欲別に見た指導内容・指導方法とクラブに対する満足度のクロス集計結果

指導内容・指導方法	低意欲		高意欲	
	x^2 値	ϕ 係数	x^2 値	ϕ 係数
技術指導	2.513	0.226	14.930***	0.208
練習方法の指導	3.603†	0.271	7.023**	0.143
練習計画の作成	0.626	0.113	4.216*	0.111
個人目標の達成のための指導	3.567†	0.270	9.480**	0.166
快適な練習のための配慮	2.706	0.235	17.698***	0.226
クラブ内の問題の解決への努力	7.855**	0.405	21.188***	0.248
悩み・不満に対するカウンセリング	0.420	0.094	2.732	0.089
クラブ内の人間関係への配慮	1.843	0.196	11.093***	0.179
指示的指導	1.859	0.197	10.145**	0.171
助言的指導	1.222	0.160	8.833**	0.160

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

IV 要 約

本研究では成熟度関連変数毎に指導内容・指導方法と満足度、モチベーション、指導者の有効性の関係を分析することにより、クラブ指導者の指導内容・指導方法と目的変数の関連性にクラブ員の成熟度が影響を及ぼしているか、また、学年、知識保持の程度、意欲が成熟度を表す尺度に成り得るか、ということの検討を研究目的とするものであったが、結果は以下のように要約できる。

1. 学年別に見た場合、2年生に構造づくり要因・配慮要因の両方に有意差の認められる変数が多数見られるだろうという仮説は、部分的にしか支持されなかった。しかし、1年生では指示的指導の方が満足度、モチベーションの高さととの連関が高いのに対して、2年生では助言的指導が目的変数との強い関連性を示したことから、説明変数と目的変数の関連性に成熟度が影響しており、学年が成熟度の指標足りうる可能性が示唆された。
2. 知識保持の程度別に見た場合、高知識群では構造づくり要因・配慮要因の両方に有意差の認められる変数が、多数見られるだろうという仮説は、部分的にしか支持されなかった。しかし、低知識群では指示的指導に、そして、高知識群では助言的指導に目的変数との強い関連性が見られたことから、説明変数と目的変数の関連性に成熟度が影響しており、知識が成熟度の指標足りうる可能性が示唆された。
3. 意欲は他の成熟度変数と併用された場合有効と考えられるが、本研究では単一で使用したため、有効性が認められなかった。

分析結果の中で成熟度の高い群で配慮要因関連変数に有意差が認められたため、成熟度の度合いによりリーダーシップ・スタイルを変化させていくSL理論の有効性の可能性が示唆されたと考えるが、検証のためには本格的な取り組みが必要であろう。また、今回は分析の単位を個人に置いたが、クラブ単位の分析も課題としたい。

注

注1) ここで使用しているデータは、平成8年度卒業論文 中野卓：「鳥取県内の高等学校公式野球部の有効性を規定する要因」で使用したデータを視点を変更し、再分析したものである。

引用・参考文献

- 1) ハーシー・ブランチャード著、山本・水野・成田訳：『行動科学の展開』，日本生産性本部，1982，pp.217～257
- 2) 野崎武司・植村典昭：「リーダーの構造づくり行動がスポーツチームに及ぼす効果」，体育・スポーツ経営学研究，第6号第1巻，1989，pp.1～7
- 3) 中村康弘：「楽しい体育のボール運動」，『体育の授業研究』，日本教育図書センター，1990，pp.176～188
- 4) 森田一寿：『経営の行動科学』，福村出版，1984
- 5) 野中郁次郎：『経営管理』，日本経済新聞社，1982
- 6) ゲスト・ハーシー・ブランチャード著，山本・水野訳：『行動科学の応用 リーダーシップと組織変革』，日本生産性本部，1980
- 7) 坂下昭宣：『組織行動研究』，白桃書房，1988
- 8) 体育科教育 特集「どこへ行く運動部活動」，第45巻第7号，1997
- 9) 学校体育 特集『教育改革と運動部活動』，第50巻第7号，1997